おーい半兵衛

剣客修行

二

森 詠

学研M文庫

剣客修行

おしゃべり兵衛

常州大学図書館
藏書

森　詠

学研M文庫

剣客修行　おーい、半兵衛◇

森　詠

学研M文庫

2013年5月28日　初版発行

発行人———脇谷典利
発行所———株式会社　学研パブリッシング
〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8
発売元———株式会社　学研マーケティング
〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8
印刷・製本 —中央精版印刷株式会社
© Ei Mori　2013 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。
★この本に関するお問い合わせは次のところへ。
・編集内容に関することは——編集部直通　Tel 03-6431-1511
・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは——
販売部直通　Tel 03-6431-1201
・文書は、〒141-8418　東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『おーい、半兵衛②』係
★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002（学研お客様センター）
落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。
本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。
複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。
日本複製権センター　TEL 03-3401-2382
http://www.jrrc.or.jp　E-mail：jrrc_info@jrrc.or.jp
Ⓡ〈日本複製権センター委託出版物〉

も-10-2

目次

第一章　剣客発見　5
第二章　果たし合い　76
第三章　隠された陰謀　150
第四章　決闘上野原　209

剣客修行

おーい、半兵衛 ◆二◆

森　詠

学研M文庫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　剣客発見　5
第二章　果たし合い　76
第三章　隠された陰謀　150
第四章　決闘上野原　209

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

第一章　剣客発見

一

半兵衛は息を詰め、松の幹の陰から立ち合いを覗いていた。

立ち合いは突然に、街道筋の松林で始まった。

どちらが仕掛けたのか、皆目見当はつかない。

一人は痩せ細った老人で、取り囲んでいるのは、見るからにどこかの藩士とわかる旅姿の侍三人だった。

老剣士は白髪混じりの総髪を後ろで無造作に束ねている。刀は抜かず、木刀代わりの棒をだらりと下げ、周囲の侍たちを半眼で睨んでいた。

街道筋の側ということもあり、たちまち往来する旅人たちが足を止め、恐る恐る立ち合いを見守っている。

一対三か。

半兵衛は数の上で有利な三人の侍が、老剣士一人を寄ってたかって嬲り殺しにする

のは卑怯だと思い、いったんは老人に加勢するために、飛び出そうとした。だが、どうも様子が変だったので、既の事で、思い止まった。

三人の侍はいずれも一文字菅笠を被り、揃いの長羽織に裁着袴を穿いた旅姿だった。大名行列の供侍だ。

三人の侍は、腕に覚えがあるらしい。三人で取り囲んではいるが、二人は老剣士が逃げぬようにしているだけで、一文字菅笠を脱ぎもせず、刀の柄に手をかけていない。

相手をしようとしているのは、三人のうちで、最も強そうな年長の武士だけであり、一文字菅笠を道端に脱ぎ捨てていた。柄を被っていた柄袋を外し、おもむろに刀を抜き、八双に構えている。

武士の構えはしっかりしており、軀は微動だにしない。武士の軀からは、殺気が迸っている。明らかに斬って捨てる気だ。

対する老剣士は骨と皮ばかりで痩せており、見るからにひ弱そうだった。老剣士の両頬はこけ、頬から顎にかけて、山羊のような白い髯をたくわえている。

老剣士は杖代わりの棒をつくと、じっと相手を眺めた。

眼光鋭くと言いたいところだが、その反対でとろんとした目つきをしている。

継ぎ接ぎだらけの汚れた襤褸の着物に、薄汚れた裁着袴を穿き、腰に小刀だけを差していた。

杖でかろうじて軀を支えているかのように、上半身はゆらゆらと揺れている。それにつれて、腰に吊るした瓢箪がぶらぶらと揺れていた。

傍目から見ても、老剣士は隙だらけで、どこからでも打ち込んでいけそうだった。

相手の武士も老剣士を見て、そう思ったらしい。

しかし、半兵衛は、老人が捨て身の構えを取っていると判じた。

身を捨てて、斬り掛かる相手を打つ。肉を切らせて骨を切る。よほどの腕前でなければ、できぬ技だ。

どこからでも打ち込めるように見えるが、その瞬間、おそらく老人の手にした杖が唸りをあげて、相手に襲いかかるはずだ。

君子危うしに近寄らず、である。

周りでは野次馬たちが、ぼそぼそ囁き合っていた。

「あんな立派なお侍さんたちが三人もかかって、たった一人の年寄りを斬ろうというのかい。そりゃあないだろう」

「いったい、あの年寄りは何をしでかしたというんだい」

野次馬たちが、こそこそと話している声が聞こえてくる。

「どうやら無礼討ちらしいぜ」

「なんでだ？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「さっき通り過ぎた細川様の大名行列の前で、先触れが来てもどこうともせず、堂々と立ち小便していたそうだ」

半兵衛は思わず吹き出しかけた。

大名行列の前で立ち小便をしていた？

なんという非常識で無礼千万な行ないであろうか。だが、並みの人間にはできぬ、実に豪胆な年寄りではないか。やはり只者ではない。

大名行列が街道を通る場合、大名が誰であれ、武士以外の身分の低い者は通りの脇に跪き、頭を下げねばならない。

武士だとて道を空け、菅笠を脱ぎ、恭順を示さねばならなかった。それが厭さに、たいていの武士は行列が来るとなったら先を急ぐか、あるいは横道に逸れて行列をやり過ごす。

もし、大名行列の行く手を邪魔したり、侮辱するような行為をした者は、供侍たちに無礼討ちされても文句は言えない。

老人はどうして逃げなかったのか。供侍が来たら、田圃にでも逃げればすむものを。

半兵衛は半ば呆れつつ、老剣士の自業自得だと思いながら、立ち合いに目をやった。

供侍は八双からゆっくりと大上段に構えを変えると、勢いよく間を詰め、老人に向かって刀を斬り下ろした。

野次馬たちの間から、小さな悲鳴が洩れる。
半兵衛も見ていられず、思わず目を閉じた。
人が斬られるのを見るのは、気色が悪い。
まして昼飯前だ。にぎり飯もまずくなる。
老人の軀がゆらりと動き、斬り下ろした侍の刀を鼻先三寸で躱した。
侍は刀を振り下ろした勢いのあまり、たたらを踏んで老人の脇を通り抜けた。
瞬間、老人の杖が大きく回転して、侍の後頭部をしたたかに叩いていた。
侍はあっけなく、その場に伸びてしまった。
残る二人の侍の驚きようはなかった。
慌てて二人とも、刀に掛けていた柄袋を取り外す。
「おのれ、小頭をなんという目に」
「油断するな。こやつ、できるぞ」
老人はと見ると、あいかわらずゆらゆらと揺れており、立っているのもやっとというように杖にすがっていた。
二人の侍は一文字菅笠をかなぐり捨て、刀を抜いた。一人は刀を正眼に構え、もう一人の若い侍は八双に構えて、左右から老人を挟み撃ちにしようとしている。
二人が打ち掛かろうとした矢先、老剣士の長い杖が動き、正眼に構えた侍の喉元に

突きを入れた。

その動きを見て、八双に構えた若い侍は、斜め上段から老剣士を斬り下ろした。

次の瞬間、老人の杖が頭上でくるりと回転し、八双に構えた侍の面を叩いた。

「うっ」

喉元を突かれた侍は唸り声を上げ、刀を取り落とした。手で喉元を押さえて、苦しがっている。

一方、面を打たれた侍も、ゆっくりと膝から崩れ落ちた。

まさに一瞬の出来事だった。半兵衛は目を疑った。

老剣士は腰の瓢箪を外して取り上げた。栓を抜いて、瓢箪に口をつけ、美味そうに中身を飲んだ。飲み終えた後、腕で口元を拭う。

三人の侍たちは、その場に這いつくばってもがいていた。

半兵衛は呆然と立ち尽くした。

剣豪だ。おそらく名のある剣客に違いない。

老剣士は倒れてもがく三人には目もくれず、杖をつきながら土手を上り、街道に戻った。

「先生！」

半兵衛は松の陰から飛び出し、いきなり老剣士の前に平伏した。

「先生、しばし、お待ちくだされい」
老剣士は一瞬ぎょっとして身構えたが、敵ではないと悟り、軀を揺らしながら、半兵衛を見下ろした。
「……？」
「先生、なにとぞ、それがしを弟子にしてください。お願いいたします」
半兵衛は頭を下げた。ふと鼻につく異様な臭いを嗅ぎ、思わず老剣士を見上げる。
老剣士は酒の臭いを、ぷんぷんさせていた。
酒の臭気だけではない。反吐や汚物の臭いのような悪臭もする。
半兵衛は鼻で息をしないようにしながら、老剣士を見つめた。
「ふん……」
老剣士は何事か口の中でぶつぶつ言いながら、腰の瓢箪を取った。栓を抜いて、またぐびぐびと酒を飲み干す。
空になった瓢箪を残り惜しげに逆さまにし、滴れてくる水滴を舐め、ふーっと息を吐いた。
老剣士の吐く息から、濁酒の甘酸っぱい匂いがした。
「先生、なにとぞ、それがしを弟子にしてください」
「なんだ、おぬしは？」

老剣士は軀をゆらゆらさせながら、じろりと半兵衛を眇で見た。
「拙者、大柿半兵衛と申す者にござる。ただいま諸国を巡り、武者修行中の身でございます」
「……武者修行だと？」
老剣士はじろりと充血した目で半兵衛を睨んだ。上体が定まらず、酔眼朦朧としているように見える。
酔っているのか。それでいて、三人の剣士を叩きのめすとは、なんという剣豪であろうか。
老剣士は、酔眼を土手下の供侍たちに向けた。
ようやく気を取り戻した供侍の二人が、まだ気を失ったままの侍を両脇から抱え起こしながら、老剣士に息巻いた。
「おのれ、われらを馬鹿にしおって……」
喉元を突かれた侍は、まだ咳き込んでいる。
もう一人が額にできた瘤を押さえながら怒鳴った。
「老体と油断したのが、我らが誤り。おぬしの名を聞かせよ！」
「……名は雲海」
「して、おぬしの剣の流派は？」

「天上天下唯我独尊神仙夢想流。畏れ入ったか」
雲海と名乗った老剣士は、あいかわらず上体をゆらゆらさせながら、嘲笑った。
「そうか、雲海。今日のところは引き揚げよう。だが、これですんだと思うなよ。他日、武士の面目は必ずや晴らす。首を洗って待っておれ」
供侍たちは、まだ気を失っている侍を両脇から抱え、ほうほうの体で逃げ出そうとしていた。
「おう、いつでも来い。待っておるぞ」
雲海はからからと、声を立てて笑った。
半兵衛は逃げて行く供侍たちを見送りながら、あらためて雲海に頭を下げた。
「雲海先生、なにとぞ、この半兵衛を弟子にしていただきたく……」
「なんだ、おまえ、まだそこにおったのか」
雲海は酔眼で、半兵衛を見据えた。
「なにとぞ、それがしを弟子に……」
「なんだ、弟子だと？」
雲海は上体を揺らしながら、怪訝な顔をした。
「わしは弟子など取らぬ。ほかをあたれ」
雲海は蠅でも追い払うように、手で半兵衛を払おうとした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com